



TITLE:

<研究論文>回想法研究の課題と展望 : 高齢者の物語る意味への接近

AUTHOR(S):

川島, 大輔

CITATION:

川島, 大輔. <研究論文>回想法研究の課題と展望 : 高齢者の物語る意味への接近. 教育方法の探究 2006, 9: 25-32

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190324>

RIGHT:

回想法研究の課題と展望

——高齢者の物語る意味への接近——

川 島 大 輔

1. はじめに

回想法の研究はここ数十年の間に目覚ましい進歩を遂げている。Butler (1963) がそれまで否定的にしか扱われていなかった高齢者の回想を、自然で普遍的な過程であると述べ、回想の肯定的側面を指摘して以来、回想の機能や効果についての基礎的研究および臨床・実践研究も数多く報告されてきた。しかしその一方で、「豊富なデータ的一方で理論が貧困である」(Webster, 1999: 30) と言われるように、回想そのものの定義の曖昧さや理論的検討の不十分さは多くの研究者によって指摘されるところであり、それが研究間の矛盾や実践現場との乖離をもたらしているといえる。そのような中、最近では回想法研究の理論および方法論の再吟味を通じて、より一層の理論的深化が模索されている。

そこで本論文では、まずこれまでの回想法研究、とくに回想の類型や効果についての基礎的研究を概観した上で、今後の回想法研究の理論的・方法論的展望を述べる。

2. 回想法とは何か

(1) 回想とは何か

回想法の起源は通常、Butler (1963) に求められるが、一般的な回想 *reminiscence* とライフレビュー *life review* の相違についてはこれまでの多くの理論家たちが意見を述べている。回想の定義については、例えば「過去を思い出す行為、あるいは過程」(Butler, 1963), 「意図的なあるいは自発的な回顧」(Havighurst & Glasser, 1972), 「遠い過去を指示する言語の行為」(Coleman, 1974) など多くの研究者が操作的定義を設けている。一方、ライフレビューは回想というよりは人生回顧と訳され、その提唱者である Butler (1963) は「死を目前にすることで活性化した回顧過程であり、潜在的に

人格の再構成へと進んでいく。したがってライフレビューは回想と同義ではないが、回想を包含するものであり、記憶の自発的再来と記憶の目的ある探索によって生じるものである」(Butler, 1963: 67) と述べている。また Merriam (1989) は単純回想が本質的に「過去の経験」の呼び起こしであるのに対し、ライフレビューは分析と評価を包含したより包括的なものであるとしている。加えて回想およびライフレビューと、その他の関連する概念との差異と重なりについても議論がなされており、例えば Webster & Haight (1995) は、自発性や回想頻度が高く、特に意味を求めない回想を「レミニッセンス」、構造化されており自己理解と評価を目的とした「ライフレビュー」、自己理解を目的としないが、構造化されており、自伝的な回想である「自伝」、そして自発性が高く、継承性を意識した物語としての「ナラティブ」と区別して定義している。

このように理論的には回想とライフレビュー、そしてその他の関連概念は同義ではないにもかかわらず、実際の臨床・実践現場においては、それほど区別されることなく用いられてきた (e.g. 野村, 1998: 10-16)。しかしオーラルヒストリー、ライフレビュー、自伝、ライフストーリー、そしてナラティブといった所謂「伝記的」アプローチが人間発達に関わる諸領域において優勢となってきた現状を鑑みれば、回想法の研究者は自らの研究対象あるいは主題を明示化することが今後一層求められるであろう (Webster, 2001)。

(2) 回想法と自我統合

回想法、とくにライフレビューにおける最も重要な概念の一つとして Erikson (1950) の提唱した統合 *integrity* が挙げられる。Erikson によれば自我の統合とは、「秩序を求め意味を探す自我の性向に対する、自我

の中に蓄積された確信」であり、「いかに高価な代償を払ってでも世の中の秩序と精神的意義を伝えようとする経験としての愛」であり、そして「自分の唯一の人生周期を、そうあらねばならなかったものとして、またどうしても取り替えを許されないものとして受け入れること」である (Erikson, 1950/1977: 232/345)。そしてこの「これまでの経験を思い出し再検討しようとする意欲」(Erikson, Erikson & Kivnick, 1986/1990: 40/40)によって特徴付けられる統合こそが、ライフレビューの潜在的推進力であると同時に、究極的に志向するものであるという (林, 1999)。

ただし併せて林 (1999) は、日本人にとって厳密な意味での統合がどの程度可能となるかについては疑問符を投げかけていることから、統合という概念そのものについても慎重な検討が必要であろう。

(3) 回想の類型

具体的に回想にはどのような類型があるのだろうか。これまでの研究からは実に多様な報告がなされているが (e.g. Coleman, 1974; 1986; Kovach, 1990; LoGerfo, 1980-81; Merriam, 1980; 1989; Romaniuk & Romaniuk, 1981; Sherman, 1991; Watt & Wong, 1991 レビューとして Haight & Hendrix, 1995; Hendrix & Haight, 2002), とくに Webster & Haight (1995) は先行文献における類型を再検討し、最終的に9つの類型を提起している。すなわち人生の意味や継続性の発見、現在の問題解決および対処に役立つ、人に知識や情報を教える役割となる、自伝的な物語を提供する、現在から逃避するため過去を懐古する、過去の未解決の困難状況を強迫的に思い出す、死に近づくことを準備する、特別な人との思い出を生きがいとする、そして過去を否定し、継続している現在をも否定する、である。この Webster & Haight の枠組みは回想法研究における膨大な類型を整理する上で非常に有用であるが、研究者ごとに異なる類型の単純な比較には問題点も多い。

また報告例は少ないものの回想のプロセスもいくつか報告されており、例えば Merriam (1989) は回想のプロセスを選択から没頭へ、そして離脱、終結という単純回想の仮説的構造を提示し、説明している。また Webster & Young (1988) は想起、評価、総合という3つの変数の重なり合う機能で回想の説明を試みてお

り、わが国では林 (1999) が高齢者およびターミナル期の入院患者のライフレビュー過程を分析した結果、同様の機能が確認されたと報告している。語られた内容の分類が研究の大半を占めている現状において、これら回想の変化に焦点化した研究は今後ますます求められるであろう。

(4) 回想の効果

回想は高齢者の死の不安を和らげ、人生の肯定的な意味づけを促進するという (Butler, 1963; Lewis & Butler, 1974)。また Coleman (1974) は過去の人生に不満がある場合、ライフレビューを積極的に行うものはそうでないものと比して有意に適応度が高く、さらに過去の矛盾を解きながら行うライフレビューは、過去の否定的影響を弱め、適応的に生きる効果を生み出すことで、不満足な過去の生活を整理することを促すと結論づけている。具体的研究としては、回想と、精神の安定や適応、サクセスフルエイジング、主観的幸福感との関連などが報告されている (e.g. Beechem, Anthony, & Kurtz, 1998; Romaniuk & Romaniuk, 1981; Wong & Watt, 1991)。しかし一方で、回想が必ずしも情緒の安定を生み出し適応を促進させる機能を果たすとは言えないとの報告も数多くなされている (e.g. Lieberman & Folk, 1971; Merriam, 1993)。この結果の不一致は、次に指摘する不十分な理論的および方法的検討によるところが大きい。

3. 回想法研究の課題

回想法研究は、ナラティブ・ジェロントロジー (e.g. Kenyon & Randall, 1999; Ruth & Kenyon, 1996) やナラティブ・サイコロジー (e.g. Bruner, 1986/1998; Sarbin, 1986) といった社会科学の領域における物語理解への動向に先んじたものであったにもかかわらず、その結論はいまだ不明瞭である (Webster, 2001)。この問題には当該研究領域において常に指摘されている、理論的および方法的検討の不十分さが大きく影響している (e.g. Coleman, 2005; Webster & Cappeliez, 1993)。とくに「回想法は、特定の理論から明示的に導き出される具体的な仮説を検証する研究が乏しいにもかかわらず、エリクソンの見解を無批判に受け入れていることが過度に限定された見方をもたらしている」(Webster,

1999: 30) との批判を考慮すれば、回想の正確かつ豊かな類型論を発達させるためにも (Coleman, 2005), 回想法研究の理論的背景および分析枠組みについての詳細な検討が必要である。以下具体的に考察する。

これまでの回想法研究を概観すると、大きく4つの理論的・方法論的問題が見られる。第一に、語りの豊かな意味、とくに意味の多重性と可変性を十分に掬い得ていなかったという問題である。つまり個人に対し何らかの類型を当てはめることに終始することで、個人内での意味の多重性やアンビバレンスといった人間の生き生きとした有様を捉えていないのである (Wong & Watt, 1991)。また、既述のとおり回想法研究においては、僅かな研究を除き、語りがどのように変化するのかというプロセスに焦点化した研究が乏しい (e.g. Coleman, 1986; Haight, 1992)。しかしライフレビューの関心が、そもそも現在における自己概念を維持するという点よりも、自己変革の可能性により関心が置かれていることを鑑みれば (Butler, 1963, Coleman, 2005), 語りがいかに変化するのかという意味構築の過程に焦点化した研究を充実させることが必要である。

第二に、「意味は個人的であると同時に、社会的なものである」(Kenyon, 2000: 9) ため、語られた意味がいかなる社会文化的文脈に埋め込まれたものかを十分に検討しなければならないにもかかわらず、研究の多くはこの文脈の重要性をこれまで十分考慮してきたとは言いがたい (e.g. Webster, 1999; 2001)。また例えば山口 (2000) が指摘しているように、日本の高齢者は、葛藤の解決や自我の統合よりも、他者との相互的な関係性に意味を見出そうとするのかも知れず、欧米における研究で報告された類型や機能、そして効果といった報告は、果たしてわが国の高齢者の回想について検討する際、どこまで有効かつ妥当なものであるのかについても慎重な検討が必要であろう。さらに Wallace (1992) はライフレビューに関する研究を再検討した上で、高齢者に対し漠然と過去を問うこと自体が、「高齢者は通常過去を回想するものである」という文化的イメージの再生産に加担していると批判している。Merriam もライフレビューはすべての人が行う一般的な過程であるか、また死が近づいてくると無意識に起こる過程なのかについては、再度検証が必要であると述べている (Merriam, 1993; 1995: 84-86)。したがって回

想が必ずしも個人の幸福感を高めるとは限らず、積極的に回想をしない、あるいは語らないことがその人の支えになっているという側面についても十分な検討が必要であろう (Coleman, 1986; Sherman, 1991)。

第三に、回想法は個人がいかに過去を想起し、物語るかという側面には多大な注意を払ってきた一方で、それが誰に對し語られたかという側面には注意をそれほど向けてこなかった。別言すれば、高齢者の物語は特定の目的のために特定の聴衆に對し語られるものであるにもかかわらず (Wallace, 1992), 語りが他者とのいかなる関係性のうちに語られるかという間主観的側面には注意を向けてこなかったのである (大村, 2003)。しかしインタビューアーないしカウンセラーは、語り手の物語に影響を及ぼすことなくその場に存在することなど不可能であり、この透明な研究者という暗黙の想定が、実践報告と基礎的研究における知見との乖離を助長している。

第四に、適切な統制の欠如、限定されたサンプル、そして貧弱な測定法といった方法論的欠点が重篤である (Coleman, 2005)。とくに Molinari & Reichlin (1984-85) が指摘するように、語りを類型化するための明瞭かつ信頼に足る分析枠組みがこれまで提供されておらず、それ故、類型が高齢者の語る意味をどれほど反映したものであるのか疑わしい。また回想の質を判断する基準には、個人の主観的意味とともに語りの構造に見られる一貫性の両方が重要であるとの指摘 (e.g. Coleman, 2005) にもかかわらず、これまでの研究の多くが語られた内容に焦点化され、構造についての詳細な分析は乏しいのが現状である。

4. 回想法研究の今後の展望

それでは既述の問題点をいかに考慮し、研究を展開していくことが可能であろうか。以下、4つの問題点それぞれについて個別に検討する。

(1) 意味への参入

これまでの回想法研究においては、既述のとおり回想類型と様々な指標との関連を問うことが主流であり、その質的な側面から分析を行っている研究は多くない (e.g. Kovach, 1995; Watt & Wong, 1991)。とくに近年では、意味に焦点化した研究の必要性も問われ始めてき

ており (e.g. 山口, 2000; 2002), それは人生を振り返る高齢者がいかに自らの人生に対する意味を見出すのか、そしてその紡がれた意味がいかに語られるかという問いに他ならない。

意味の多重性やアンビバレンスを扱う上で有意義な示唆を提供する研究として、まず Kaufman (1986/1988) が挙げられる。彼女は高齢者の語る豊かな意味世界に参入することで、「対象となった老人たちは、老いそのものではなく、老年期にある自分自身の姿を通して老いの意味をとらえている」(Kaufman, 1986/1988: 6/6) と考察し、その過去から現在に至る不変な自己を「エイジレス・セルフ」と名付けている。とくに高齢者が自らの人生を物語る際に用いる、意味の源泉と呼ばれるテーマについての検討は、主観的意味を扱う際の参照枠組みとして有益である。

また Reker & Wong (1988) は、エイジングに関連した主観的意味についての新しい見方を提示している。より詳細に述べると、解釈科学 (Rabinow & Sallivan, 1979) を認識論的基盤として、意味の構成概念および理論的パースペクティブといった主観的意味の本質、意味構築に密接に関連する文脈や時間、さらに意味を研究の俎上に載せる具体的方法について検討している。この Reker & Wong (1988) による一連の主観的意味理論 Theory of Personal Meaning は、意味内容への具体的アプローチを呈しているという点において、今後の回想法研究における新しい理論的、方法論的展開の指針となる可能性を秘めている。ただし O'Connor & Chamberlain (1996) が質的分析によってその有効性を検討した結果、意味の深さの次元については概念のさらなる精緻化が必要であるとしている。また意味の次元が享楽主義的なものから、個人の成長や自己実現、そして対人的・社会的・政治的なものを経て、自己超越あるいは究極の目的や意味へと展開するという線形化された図式はわが国の高齢者の意味の次元について検討する際、どれほど妥当であるかについては再吟味することが必要であろう。

一方、語りの変化プロセスを把握するための方法として、第一に、短期間での回想法セッションを通じた変化への焦点化が考えられる。つまりこれまで回想法グループへの臨床的介入の前後において適応度などの効果測定が行われてきたが (e.g. Haight, Coleman &

Lord, 1995), 各セッションの微視的発達過程を詳細に描いたものは少なく、また健康な高齢者を扱った研究や個人に焦点化した研究も乏しい。今後は実験の手続きの明確化とともに、よりダイナミックな発達変化の過程を描くことが必要である。第二に、継続的調査による長期間での変化への焦点化が考えられる。語りの長期的変化を取り扱った研究は非常に僅かであるが、語りの発達変化の有様を描くのであるならば、老年期に留まることなく、人間発達の初期からの大規模かつ長期的な調査が必要である。そして第三に、語り内の変化プロセスへの焦点化が考えられる。すなわち上記の2つがクロノロジカルな時間を主として扱うのに対し、語り内の変化プロセスとは、語られた時間あるいは物語としての時間という主観的な時間を扱うのである。とくに高齢者の物語に接近する場合、後者の重要性を認識することは重要である (Kaufman, 1986/1988, Kenyon & Randall, 1997; 2001)。それ故、高齢者に対し人生生涯に亘る変化そのものの主観的意味、別言すれば生涯に亘り何がどのように変化したと「意味づけて」いるのかを問う研究も必要であろう。

(2) 社会文化的文脈との相互交渉

社会文化的文脈については、老年学的一大潮流である、ナラティブ・ジェロントロジー (Kenyon & Randall, 1999; Ruth & Kenyon, 1996) が、回想法研究に新しい志向性を提供している。Kenyon & Randall (2001) はナラティブ・ジェロントロジーの5つの基本的前提を提起しているが、その中でもとくにストーリーは制度的、社会文化的、対人的、個人的次元という、4つの相互に関連する次元によって構成されているとする「多次元性」、意味は独特で、個人的なものである一方で、同時に社会的・対人的文脈のうちにおいて構築あるいは発見されるものであるとする「逆説性」は、専ら語りの個人的側面にのみ焦点化してきた回想法研究に大いなる示唆を呈するものである。

さらに先に述べた Kaufman や Reker & Wong も意味が個人的な志向性の一方で、社会的に構築されるという二重性を述べていることから、ナラティブ・ジェロントロジーが包含する理論的立場の1つとして考えることができる。したがって回想法研究の志向性は、個人の物語に見られる意味が、いかなる社会文化的文脈

に位置づけられるか、そしてその文脈との相互交渉の中でどのように意味が構築されるのか、言い換えるとどう「折り合いをつけている」(Kaufman, 1986/1988)のかということになる。

また老いの理論そのものがある種の話であり、研究はその影響下において展開されることから(Kenyon & Randall, 1999; 2001),「高齢者は過去について語るものである」という言説自体を再構築することが必要である。具体的には、個人の物語に焦点化する一方で、一定の範囲に流布した語りのジャンルを同定していくこと(Bruner, 1999),そしてそれらとのいかなる相互交渉のうちに意味が構築されるのかを明らかにしていくことが必要である(e.g. Gubrium & Holstein, 2002; Kenyon & Randall, 1999; 2001)。

(3) アクティブという視点

Holstein & Gubrium (1995/2004)が述べているように、インタビューは無色透明な行為でもなければ、情報が歪曲される原因でもない。むしろそれは報告できる状況それ自体を算出する場所なのである。したがってインタビューアーおよびインタビューイーのいずれも意味構築の作業に関わっているという点において、両者は必然的にそして不可避免的に「アクティブ」である(e.g. Gubrium & Holstein, 2002; Holstein & Gubrium, 1995/2004: 4/21)。それ故に、回想法研究という通常インタビュー法を用いる研究においても、いかにその語りが呈されたかについての省察が必要不可欠であろう。具体的には、物語同士の結びつきや回答者の志向性、そして混乱や矛盾、曖昧さや抵抗を包含したダイナミックな側面を、語られた内容と同時に扱うことが必要なのである(Holstein & Gubrium, 1995/2004: 78-79/198)。

さらにアクティブな視点はインタビュー場面において、複数の参加者が加わることで、物語が「多声的」なものになるとしている。そしてそれは異なった役割を持つインタビューアーの参加や、配偶者を伴ったインタビュー、グループインタビューを意味づけの豊かさを際立たせるものとして、推奨している(Holstein & Gubrium, 1995/2004: 66-72/168-184)。これはグループ回想法が頻繁に実施されているにもかかわらず、そこで展開される語りのダイナミズムが十分に検討されてきていない回想法研究の現状に対し、大いなる示唆を呈

するものであろう。

(4) トライアングレーション

高齢者の物語の意味への接近は、既述の理論的・方法的アプローチにより可能となろう。しかしより意味の多面的側面に光を当てるならば、データ収集の方法や手続きの組み合わせ、すなわちトライアングレーションを行うことも必要である(e.g. Willig, 2001/2003: 30/40-41)。

まず意味の豊かさを掬うための有効なアプローチとして、その意味内容やテーマに加えて、構造に焦点化した研究が有用である。とくに Harbermas & Bluck (2000)は統合的で満足いくライフストーリーの本質的特徴として、時間的、因果的、そして主題的一貫性および伝記についての文化的概念という4つの型を、さらにこれを受けて野村(2005a)は語り手が語りの場という状況要因を考慮して維持される状況的一貫性の枠組みを新たに提起しており、意味の構造について検討する際の参照枠として有効である。ただし、構造の一貫性を伴わない特定の出来事の語り直しは一方で、否定的な出来事を発達と英知獲得の機会へと転じる可能性を秘めたものでもある(Kenyon & Randall, 2001)。そしてその態度変容の回想こそがライフレビューという名前で呼ばれてきたのであるならば(Coleman, 2005),回想法研究の志向性は固定した一貫性ではなくむしろその変化の過程に焦点化されるべきであろう。

また意味への接近をより円滑にするための道具として、例えば誘導的自伝 Guided Autobiography(Birren & Deutchman, 1991)やライフライン・インタビュー法 Lifeline Interview Method (Schroots, 1991)は、高齢者の物語への接近をより円滑にするための方法として有効である(e.g. Schroots & Birren, 2002; Shaw, 2002)。その他、写真や映画、文学、インターネットなどの様々な道具の併用も今後ますます必要となってくると考えられる(Rowles, 2002)。

さらに構造化されたライフレビューやインタビューという形式において語られる意味と、高齢者が日々生活を営むという文脈において語られる意味は必ずしも同一ではない。したがって今後の回想法研究は、高齢者の日々の生活への様々なフィールドワークを通じたエスノグラフィックな研究によってその生態学的妥

当性を検証することも求められるだろう(野村, 2005b)。

5. 総括的考察

本論文では、回想法に関連する諸研究を概観し、その上で理論的・方法論的課題および展望について述べてきた。要約すれば、今後の回想法研究は、意味、社会文化的文脈、アクティブな視点、そしてトライアンギュレーションを考慮することにより、より洗練されたものへと展開することが可能であろう。

わが国の高齢者を対象とした回想法の研究は、臨床・実践現場における広がりとは十分とは言えない。既述の理論的・方法論的考察の妥当性を今一度検証するためにも、まずは実証的データの蓄積が必要不可欠である。今後当該研究領域のますますの発展を願ってやまない。

謝 辞

本論文の作成に当たり、丁寧なご指導をいただきましたやまだようこ教授に記してお礼申し上げます。また多くの高齢者の方々との研究活動の内外を通じた関わりなくして、本論文の着想を得ることはできませんでした。感謝申し上げます。

引用文献

- Beechem, M. H., Anthony, C. & Kurtz, J. (1998). A life review interview guide: A structured systems approach to information gathering. *International Journal of Ageing and Human Development*, 46(1), 25-44.
- Birren, J. E., & Deutchman, D. E. (1991). *Guiding autobiography groups for older adults: Exploring the fabric of life*. Baltimore, MD: John Hopkins University Press.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge: Harvard University Press. (Bruner, J. (1998). 可能世界の心理. (田中一彦, 訳). 東京: みすず書房.)
- Bruner, J. (1999). Narratives of aging. *Journal of Aging Studies*, 13(1), 7-9.
- Butler R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 26, 65-76.
- Coleman, P. G. (1974). Measuring reminiscence characteristics from conversation as adaptive features of old age. *International Journal of Aging and Human Development*, 5(3), 281-294.
- Coleman, P. G. (1986). *Ageing and reminiscence processes: Social and clinical implications*. Chichester: Wiley.
- Coleman, P. G. (2005). Reminiscence: Developmental, social and clinical perspectives. In M. L. Johnson (Ed.), *The Cambridge handbook of age and ageing* (pp.301-309). Cambridge: Cambridge University Press.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company. (Erikson, E. H. (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2. (仁科弥生, 訳). 東京: みすず書房.)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital Involvement in Old Age*. New York: W. W. Norton & Company. (Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1990) 老年期: 生き生きしたかかわりあい. (朝長正徳・朝長梨枝子, 訳). 東京: みすず書房.)
- Gubrium, J. F. & Holstein, J. A. (2002). The active subject in qualitative gerontology. In Rowles, G. D. & Schoenberg, N. E. (Eds.), *Qualitative Gerontology* (2nd Ed.). (pp.154-171). New York: Springer Publishing Company.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, 126(5), 748-769.
- Haight, B. K. (1992). Long-term effects of a structured life review process. *Journal of Gerontology: Psychological Science*, 47(5), 312-315.
- Haight, B. K., Coleman, P., & Lord, K. (1995). The Linchpins of a successful life review: Structure, evaluation, and individuality. In B.K. Haight & J.D. Webster. (Eds.), *The Art and Science of Reminiscing: Theory, research, methods, and application* (pp.179-192). Washington, DC: Taylor and Francis.
- Haight, B. K., & Hendrix, S. (1995). An integrated review of reminiscence. In B.K. Haight & J.D. Webster. (Eds.), *The Art and Science of Reminiscing: Theory, research, methods, and application* (pp.3-21). Washington, DC: Taylor & Francis.

- Haight, B. K., & Webster, J. D. (Eds.), (1995) *The Art and Science of Reminiscence : Theory, research, methods, and applications*. Washington, DC: Taylor and Francis.
- Havighurst, R. J., & Glasser, R. (1972). An Exploratory Study of Reminiscence. *Journal of Gerontology*, 27(2), 245-253.
- 林 智一. (1999). 人生の統合期の心理療法におけるライフレビュー. 心理臨床学研究, 17(4), 390-400.
- Hendrix, S., & Haight, B. K. (2002). A continued review of reminiscence. In J. D. Webster, & B. K. Haight. (Eds.), *Critical Advances in Reminiscence Work: From Theory to Application* (pp.3-29). New York: Springer Publishing Company.
- Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). The active interview. London: Sage Publications. (Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (2004). アクティブ・インタビュー: 相互行為としての社会調査. (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行, 訳). 東京: せりか書房.)
- Kaufman, S. R. (1986). *The ageless self: Sources of meaning in late life*. Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press. (Kaufman, S. R. (1988). エイジレス・セルフ: 老いの自己発見. (幾島幸子, 訳). 東京: 筑摩書房.)
- Kenyon, G. M. (2000). Philosophical Foundations of Existential Meaning In G. T. Reker, & K. Chamberlain (Eds.), *Exploring Existential Meaning* (pp.7-22). Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage Publications.
- Kenyon, G. M. & Randall, W. (1997). *Restorying our lives: Personal growth through autobiographical reflection*. Westport, CT: Praeger.
- Kenyon, G. M., & Randall, W. L. (1999). Introduction: Narrative gerontology. *Journal of Aging Studies*, 13(1), 1-5.
- Kenyon, G. M., & Randall, W. L. (2001). Narrative gerontology: An overview. In G. Kenyon, P. Clark, & B. de Vries. (Eds.), *Narrative Gerontology: Theory, research, and practice*. (pp.3-18). New York: Springer Publishing Company.
- Kovach, C. R. (1990). Promise and problems in reminiscence research. *Journal of Gerontological Nursing*, 16(4), 10-14.
- Kovach, C. R. (1995). A qualitative look at reminiscing: Using the autobiographical memory coding tool. In B.K. Haight & J.D. Webster. (Eds.), *The Art and Science of Reminiscing: Theory, research, methods, and application* (pp.103-122). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Lewis, C. N., & Butler, R. N. (1974). Life review therapy: Putting memories to work in individual and group psychotherapy. *Geriatrics: official journal of the American Geriatrics Society*, 29(11), 165-173.
- Lieberman, M. A., & Falk, J. M. (1971). The remembered past as a source of data for research on life cycle. *Human Development*, 14, 132-141.
- LoGerfo, M. (1980-81). Three ways of reminiscence in theory and practice. *International Journal of Aging and Human Development*, 12(1), 39-48.
- Merriam, S. B. (1980). The concept and function of reminiscence: A review of the research. *The Gerontologist*, 20(5), 604-609.
- Merriam, S. B. (1989). The structure of simple reminiscence. *The Gerontologist*, 29(6), 761-767.
- Merriam, S. B. (1993). Butler's life review: How universal is it? *International Journal of Aging and Human Development*, 37(3), 163-175.
- Merriam, S. B. (1995). Reminiscing and the oldest old. In B.K. Haight & J.D. Webster. (Eds.), *The Art and Science of Reminiscing: Theory, research, methods, and application* (pp.79-88). Washington, DC: Taylor and Francis.
- Molinari, V., & Reichlin, R. E. (1984-85). Life review reminiscence in the elderly: A review of the literature. *International Journal of Aging and Human Development*, 20(2), 81-92.
- 野村晴夫. (2005a). 構造的ー貫性に着目したナラティブ分析: 高齢者の人生転機の語りに基づく方法的検討. 発達心理学研究, 16(2), 109-121.
- 野村晴夫. (2005b). 老年期の語り, 意味, 自己. 遠藤利彦 (編), 発達心理学の新しいかたち (pp.239-259). 東京: 誠信書房.
- 野村豊子. (1998). 回想法とライフレビュー: その理論と技法. 東京: 中央法規出版.
- O'Connor, K., & Chamberlain, K. (1996). Dimensions of

- life meaning: A qualitative investigation at mid-life. *British Journal of Psychology*, 87, 461-477.
- 大村 壮. (2003). 高齢者の回想法の効果評価の検討: 「想い出す」～「語る」から「語る」～「聴く」へ. 中央大学大学院年報, 32, 137-145.
- Reker, G. T., & Wong, P. T. P. (1988). Aging as individual process: Toward a theory of personal meaning. In J. E. Birren, & V. L. Bengtson (Eds.), *Emergent theories of aging* (pp.214-246). New York: Springer Publishing Company.
- Romaniuk, M., & Romaniuk, J. (1981). Looking back: An analysis of reminiscence functions and triggers. *Experimental Aging Research*, 7(4), 477-489.
- Rowles, G. D. (2002). Introduction. In G. D. Rowles, & N. E. Schoenberg (Eds.), *Qualitative Gerontology* (2nd Ed.). (pp.234-240). New York: Springer Publishing Company.
- Ruth, J. E., Kenyon, G. M. (1996). Introduction: Special issue on Ageing, Biography, and Practice. *Ageing and Society*, 16(6), 653-657.
- Sarbin, T. R. (Ed.). *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York: Praeger.
- Schroots, J. J. F. (1991). Metaphors of aging and complexity. In G. M. Kenyon, J. E. Birren, & J. J. F. Schroots (Eds.), *Metaphors of aging in science and the humanities* (pp.219-243). New York: Springer Publishing Company.
- Schroots, J. J. F., & Birren, J. E. (2002). The study of lives in progress: Approaches to research on life stories. In G. D. Rowles & N. E. Schoenberg (Eds.), *Qualitative Gerontology* (2nd Ed.) (pp.51-65). New York: Springer Publishing Company.
- Shaw, M. E. (2001). A history of guided autobiography. In G. Kenyon, P. Clark & B. de Vries. (Eds.), *Narrative Gerontology: Theory, research, and practice* (pp.291-309). New York: Springer Publishing Company.
- Sherman, E. (1991). *Reminiscence and the self in the old age*. New York: Springer Publishing Company.
- Wallace, J. B. (1992). Reconsidering the life review: The social construction of talk about the past. *The Gerontologist*, 32(1), 120-125.
- Watt, L. M., & Wong, P. T. (1991). A taxonomy of reminiscence and therapeutic implications. *Journal of Gerontological Social Work*, 16(1-2), 37-57.
- Webster, J. D. (1999). World views and narrative gerontology: Situating reminiscence behavior within a lifespan perspective. *Journal of Aging Studies*, 13(1), 29-42.
- Webster, J. D. (2001). The future of the past: Continuing challenges for reminiscence research. In G. Kenyon, P. Clark & B. de Vries. (Eds.), *Narrative Gerontology: Theory, research, and practice*. (pp.159-185). New York: Springer Publishing Company.
- Webster, J. D., Cappeliez, P. (1993). Reminiscence and autobiography memory: Complementary contexts for cognitive aging research. *Developmental review*, 13(1), 54-91.
- Webster, J. D. & Haight, B. K. (1995). Memory lane milestones: Progress in reminiscence definition and classification. In B.K. Haight & J.D. Webster. (Eds.), *The Art and Science of Reminiscing: Theory, research, methods, and application* (pp.273-286). Washington, DC: Taylor and Francis.
- Webster, J. D., Young, R. A. (1988). Process variables of the life review: Counseling implications. *International Journal of Aging and Human Development*, 26(4), 315-323.
- Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham, Philadelphia: Open University Press.
- (Willig, C. (2003). 心理学のための質的研究入門: 創造的な探求に向けて(上淵寿・大家まゆみ・小松孝至, 訳). 東京: 培風館.)
- Wong, P. T. P., Watt, L. M. (1991) What types of reminiscence are associated with successful aging? *Psychology and Aging*, 6(2), 272-279.
- 山口智子. (2000). 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み: 回想についての基礎的研究として. 心理臨床学研究, 18(2), 151-161.
- 山口智子. (2002). 人生の語りにおける語りの変容について: 高齢者の回想に関する基礎的研究. 心理臨床学研究, 20(3), 275-286.

(博士後期課程)